

光の如く

燕ではなく鬼の頸を切るために

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

才能がないと言われた少年は独自の呼吸と型を創り、鬼の頸を切り裂く。

光の如く

目

次



# 光の如く

俺は煌坂 駿之介。

鬼殺の剣士になるために修業している。

——お前にはこの呼吸の型は向いていない。

育手の師匠に全ての型を披露した後に言われた言葉だ。

鬼殺隊に入る為に必要な全集中の呼吸。俺はその一つである雷の呼吸を修得して六つある型を練習した。

しかし、師匠に認めてもらえたのは半分の三つだった。

式ノ型 稲魂。

肆ノ型 遠雷。

陸ノ型 電轟雷轟。

この三つが俺が使える雷の呼吸の型。

この三つには共通点がある。

それは、脚を使わなくても技が出せる点だ。

師匠は早々に俺の指導を止めて他の弟子の方の指導をしに行つた。

初めて悔しいという感情を知った。見返してやる、と心に決めて修業に打ち込んだ。  
決め技とも言える壱ノ型霹靂一閃などの脚を使う型が出来ない俺はどうすれば良い  
のか考えて、考えて、考えた。

考えた末に辿り着いた答えは――。

自分に合つた呼吸と型を創ろう、だつた。

半年掛けて創り出した呼吸の名は、『光』。

雷の呼吸の持ち味である速さをさらに磨きあげ、脚を使わなくとも、鬼に近付かなく

ても鬼の頸を切るのが特徴とも言えるのが光の呼吸。

これを師匠に見せたら日輪刀とお金を渡され最終選別が行われる藤襲山への行き方を教えられた。

厄介払いという感じなのだろうか？

変な事を考えても仕方がないのでとつとと最終選別に向かおう。

「光の呼吸 弐ノ型 石火<sup>せつか</sup>」

「肉ツ！ 嘰わせツ?!」

鬼が言葉を最後まで言えず頸だけが飛んでいった。

頸は飛んだ。だが、鬼はまだ死んでいない。

それもそのはず、日輪刀で直接切つてはいらないのだから。

俺がやっているのは飛ぶ斬撃による攻撃だ。

『石火』は牽制用の技だが狙いを誤れば放つた斬撃で木や壁を切り裂いてしまうので

団体行動がし難い。

### 「石火 五連」

頸が飛んで動搖した隙に胴体を切り刻んでから落ちた頸を切る。鬼が消滅したのを確認してその場から立ち去る。

型の確認を兼ねた最終選別も後半に突入した。

型の確認も一通り出来たのでこのまま最終日まで何事もなく終わる事を祈ろう。そんな事を考えていたら……地面が揺れた。

揺れの発生源と思われる方向に呼吸で強化した脚で跳ぶ様にして走っていく。

「くそ！くそっ！こんな時に刀が、こいつを倒さないと男として義勇に……鱗滻さんに顔向け出来ない！」

「さあてと、死ねえ——！鱗滻の弟子イ——！」

空けた場所に巨大な手に覆われた異形鬼と狐の面を着けた少年がいた。異形鬼の巨大な腕が狐の面の少年に向かっている間に限界近くまで脚に力を込めて

飛び込む。

光の呼吸 伍ノ型 光彩陸離。

それはまばゆい光の様に切り裂く無差別の斬撃。空中でこそ真価を發揮する技で鬼の腕は微塵切りとなつた。

「あ、あの腕を一瞬で!?」

「何なんだ、キサマアア!?」

鬼の言葉に俺は簡単に応えた。

「ただの鬼狩りだ」

光の呼吸 壱ノ型 光華一閃。

再生が間に合つてない鬼の横にすれ違う様に脚は走る様な速さで、然れど腕は抜刀と納刀がほぼ同時の速さで鬼の頸を切り裂いた。

藤襲山、最終選別の最大の敵の頸は落とされた。

煌坂 俊之介  
こうさか しゅんのすけ

煌坂 俊之介  
こうさか しゅんのすけ

光の呼吸

・壱ノ型

光華一閃  
こうかいいせん

拔刀と納刀がほぼ同時の居合い。

・弐ノ型

石火

連打可能な飛ぶ斬撃。

・参ノ型

残影

途中で停まつたように見える騙しの居合いな飛ぶ斬撃。

・肆ノ型

寂光土  
じやうこうど

干天の慈雨に似た技ではあるが、相手に痛みをわざと感じさせない攻撃。

・伍ノ型

光彩陸離こうさいりくり

空中で真価を發揮する無差別の飛ぶ斬撃。

・陸ノ型

漣の波光さざなみのはこう

流れるような脚運びで繰り出す技を中断もしくは終わらせるまで納刀しない連撃。

・漆ノ型

天照大神あまてらすおおかみ

脚を止めた状態で行う抜刀と納刀が分からぬ多次元屈折現象により同時に放たれる二方向からの頸を切る為の奥義。

雷の呼吸からの派生。

水と炎の特色がチラツと覗かせる型。

日輪刀の色は橙色。